

教員の資質能力向上のための研修の在り方

芦 田 哲

The way of the training for nature improvement of the teachers

Satoshi Ashida

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別 冊

平成 30 年 2 月 28 日 発 行

教員の資質能力向上のための研修の在り方

The way of the training for nature improvement of the teachers

芦 田 哲

Satoshi Ashida

はじめに

担任が園児に絵本を読んでいる。園児は目を輝かせ、うなずきながら絵本に食い入るように聞いている。そこには双方向のとても温かい人間関係が感じられる。テレビは集中していても一方からの伝達しか感じられない。トラブルが起きた時、担任が「どうしてけんかになったの」「どうすればよいか」などお互いの話を丁寧に聞いている。話が十分にできない園児には、視線を合わせ「A君は積み木で遊びたかったんだね」と話を聞き出し、「A君は積み木を使って自動車を作ろうとしていたんだって、だから積み木を使いたかったんだって」など代弁しながら、お互いが納得するように話をしながら解決している。信頼関係がしっかり築かれている担任だからこそ話を聞き出すことができ解決に至ったのである。人工知能やコンピュータ等がいかに発達してこようとトラブルの解決はできない。

教育は人が人を教えることであり、信頼関係が築かれている中で一つ一つのことが丁寧に行われることが最も大切なことである。

倉橋惣三氏は「古ぼけたゴム毬は取りかえてやればいい。惰性化した教育は内から弾力を盛り返すほかはない。教育は子どもに与えるものである。自らを新たにする努力を欠いた教育を与えるほど、子どもに気の毒なことではない。むしろ無残である」¹⁾

大村はま氏は、「なぜ、研究しない教師は教師として困るのでしょうか。研究には、楽しみもありますが、苦しみのほうがずっと多いと思います。高いものを目指したり、得たいものを目指したりして、苦しみながら、少しの楽しみを味わいながら、自分を伸ばしていこうとします。自分を伸ばす苦しみと楽しみのなかで生きています。そして、それは、学ぶ子どもたちの姿なのです。ですから、研究をつづけ、学びつづけることは、子どもと同じ床に立ち、同じ世界にいることなのです。研究していなければ、そこが崩れてしまいます。子どもと違う世界の人、子どもと同じ床の上にはいない人になってしまいます」²⁾と研修の大切さについて述べている。

人こそ最大の教育環境であり、ましてや幼児期は教員との関わりが大きく影響している。そのため

にも教員は保育に関する専門的知識・技術はもとより、人間性を高めていくことが重要なことである。自らの職務を自覚し、研修の目的を明確に持ちながら研修に絶えず努め資質向上に努めていかなければならない。

そこで、教員としての資質能力向上させていくための効果的な研修の在り方について考える。

第1. 幼稚園教員の資質向上の意義

幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議は、『幼稚園教員の資質向上について－自ら学ぶ教員のために』（報告）の中で、幼稚園教員の資質向上の意義について次のようにまとめている。³⁾

幼児期は、人間形成の基礎が培われる極めて重要な時期であり、他者の存在を意識し始め、人とのつながりや周りへの興味や関心が広がる時期である。幼児は、初めての集団生活である幼稚園において、主体的な活動としての遊びを通じ、他者との違いに気付き、ともに活動する喜びを得、自らの好奇心を高めるなど、生きる力の基礎を得ることができるようになるので、遊びを通した総合的な指導を行うことが重要である。

幼稚園教員は、幼児を内面から理解した上で、幼児の主体的な活動が確保されるように物的・空間的環境を構成するとともに、また、幼児の活動を豊かにするための役割が期待されており、幼児教育における中核的な役割を担っている。このため、幼稚園教員に優れた人材を得、また、その資質向上を図ることは極めて重要である。

幼稚園教員に求められる資質には、いわゆる「不易」と「流行」の部分があると考えられる。まず、いつの時代にも求められる、幼児を理解し、総合的な指導をするために必要な資質は「不易」として位置づけられ、常に原点に立って向上させていくべきものである。一方、現在、幼稚園を取り巻く環境が大きく変化する中、新たに幼稚園教員に求められるようになってきた資質には、「流行」として位置付けることができ、幅広い生活体験や社会体験を背景とした柔軟性やたくましさを基礎として向上させていくことが重要である。

第2. 研修体系

続いて各段階の課題と展望を「幼稚園教員の養成・採用・現職の各段階における課題と展望」として以下のようにまとめている。³⁾

養成段階における課題と展望として、養成段階における基本的視点は、幼児理解に基づき、遊びを通して総合的に指導するという幼稚園教員の基盤的な専門性を養成することが、まず取り組むべき重要なことであり、

1. 教員志望者自身の多様な体験・得意分野の素地の形成
2. 実践力の育成

3. 上級免許状の取得、免許状及び資格の併有
4. 教員養成のための教育環境の充実
5. 幅広い幼稚園教員志望者の確保 などが重要である。

養成段階のことについては、昨年度豊岡短期大学論集 13 号に「新たな時代に向けた教員養成の改善方策についての一考察」と題して、学生が今備わっていると考えている資質能力は何か、卒業までに身に着けたいと考えている資質能力は何か、それをどのようにして身に付けようとしているか等についてアンケート調査を中心としてまとめた。

「学生は、ボランティア活動に取り組んだり多くの人と出会い話をしたりして人間性を高めようとしたり、製作活動や手遊び、絵本の読み聞かせに取り組んだりして得意分野を増やそうとしている。また、新聞やテレビを見たり読書をしたりして、価値観を多様にしながら社会情勢の把握に努めようとしている」⁴⁾

採用段階での課題と展望としては、採用段階における基本的視点は、年齢、経験及び性別などの職員構成に配慮した採用の工夫を行うことが重要であり、

1. 幅広い能力や経験をもつ者の採用
2. 幼稚園運営の現状に即した採用
3. 人事交流による人材確保
4. 処遇面における配慮 が重要である。

現職段階における課題と展望として、現職段階における基本的視点は、研修の役割と構造化、研修の目的・目標・手法、自主研修の意義、資質向上への動機づけが重要であり、

1. 園内研修・園外研修の充実
2. 教職経験に応じた研修の充実
3. 多様なニーズに応じた研修
4. 自主的研修の環境の整備
5. 研修の充実
6. 地方公共団体による研修体制の充実
7. 養成機関との連携及びその研修機能の強化
8. 管理職の登用と円滑な登用のための研修 が重要である。

各段階における研修の中で、現職段階における研修こそ最も教員としての資質向上を図ることができ、充実させなければならない。その中の園内研修・園外研修で主として取り組まれている保育実践を通じた研修は、直接子どもと関わりながら取り組むことで、理論と実践を結びつけることができ、実践

力を付けることができる。また子どもの動きや保育者の指導を具体的に見て研修することができるので、具体的な話し合いができ資質向上を目指すには効果的な研修である。

保育者が子ども達の考えや活動を予想しながら、環境の構成を考えたり指導方法を考えたりして取り組んだことに対して、職員がお互いに忌憚なく意見を交わしながら、さらに子ども達を成長させていくための環境の構成や指導方法について協議を重ねていくことは、資質向上に繋がる。

そこで、私が以前勤務した豊岡市幼稚園会北地区での取組から資質向上のための研修について考える。

第3. 保育実践を通して研修を深める

1. 合同で取り組む

豊岡市北地区幼稚園会では、以前から全教員でグループを編成し、グループ内で順番に研究保育をし、保育実践を参観した後事後研究会を持ち、テーマに沿って保育実践の内容について協議を重ねたり、各自が実践事例を持ち寄り報告したりしながら研修に取り組んでいた。全教員でグループを編成して研修に取り組むことにしたのは、各園の教員が少なく園内での研修が十分できないため多くの教員から指導を受けることが研修の充実になると考えたことと、コミュニケーションを図ることがねらいであったと思われる。

事後研究会での話し合いは、指導案や保育実践などをもとに「環境の構成の在り方」などの研究のテーマに沿って、意見を出し合い内容を深めた。園内だけの研修では議論が深まらないところを、グループを編成することで人数が増え多様な考えが出されたり、他園の取組も聞くことができたりして充実した研修に取り組むことができた。

しかし事後研究会での話し合いを充実させるためには、研究保育の中で重点となる場面や課題のある場面などは、繰り返し確認しながら話し合いをすることで研修をさらに深めていくことができると考えた。

そこで私が研修担当になった時に、保育実践をビデオに撮影して事後研究会でそれを鑑賞しながら話し合うことにした。

(1).研修計画

- ・教員を4グループに分ける。
- ・各グループに研修担当者を置く。
- ・研修担当者会を定期的に開催し、進捗状況の共通理解等を行う。
- ・全員保育指導案を作成する。(指導案には今日の保育の視点を書いておく)
- ・保育指導案を基に保育実践を行うとともに、その内容をビデオに撮影する。
- ・事後研究会を開催し保育実践を基に話し合い研修を深める。

- ・全体会を開催し、各グループの取組を報告し研修内容を交流する。
- ・研修内容は冊子にまとめ全員に配布する。

(2).事後研究会の研修方法

- ・事後研究会はビデオを鑑賞しながら話し合いを行う。
- ・事後研究会の話し合いは、研修テーマに沿ってポイントとなることを共通理解し、話し合いの柱を絞る。
- ・全員が意見を発表できるようにする。

(3).成果と課題

- ビデオを鑑賞しながら話し合うことで、全員が保育内容を共通理解することができた。
- ポイントとなる場面を何度も確認することができ、話し合いの内容を深めることができた。
- 指導の振り返りをするのができ、以後の指導に活かすことができた。
- 話し合いの時に人数が多いことは、多様な意見が出て話し合いの内容を深めることができた。
- 園の職員が少ないため、ビデオ撮影をいつするか撮影者との日程調整が必要であり、保育計画とずれることがあった。
- 保育内容によっては活動場所が多岐に渡ることがあったり、保育者を中心に撮影するのか、園児の活動を中心に撮影したりするのかなどどこにポイントを置いて撮影するか難しかった。
- 広範囲から教員が集まるので、それぞれの園の行事等のこともあり研修日の日程調整が難しかった。

(4).研修の充実のために

まずビデオを撮影するポイントとして考えなければならないことは、撮影者が保育実践の内容をしっかり把握しておくことである。指導者は指導案を作成するときに、園児たちがどのようなことを考えるか、どのような行動を取るか、教材や教具はどのようなものを準備しておけばよいか、保育の場所はどこが良いか、教材・教具の位置はどこが良いかなどいろいろと予想する。

その中で今日の保育ではここを特に大切にしたいというところがある。指導者はそこを事前に撮影者と打ち合わせをしておくことが大切である。撮影者が撮影するポイントをしっかり認識しておくということである。

また、話し合いでは、例えば私がいたグループでは、事後研究会での話し合いの時に最初に指導者が今日の保育のポイントにしたところや実践した結果について提案し共通理解した後、参加

者が、指導者が提案したことやテーマに絡んだことなどについて意見や考えを付箋に書いて掲示し、各自が発表しながら話し合いをしていった。別のグループでは、まず若い教員が先に意見や考えを発表し、その後ベテランの教員が意見を発表するなどしていた。

話し合いは、若い教員もベテランの教員も同じように意見を言い合うことができるようにすることが大切である。ベテランの教員が意見を言うと、若い教員が意見を言えなくなってしまうようなことは避けなければならない。付箋を活用したり若い教員が先に意見や考えを発表したりすることで、話し合いが活発になり内容が充実していった。

グループで取り組んだ内容は、全教員が参加して全体会を行い、各グループの進捗状況や研修の取組内容を報告し評価し合うとともに、年度末には冊子にまとめ全教員で共有した。

2. 園内研修の取組

(1).新任教員研修

豊岡市が4歳児から園児を受け入れ2クラスになった時に、ベテラン教員(5歳児担任)と新任教員(4歳児担任)の組み合わせになった。そこで新任教員が早く自信を持って指導ができるように、ベテラン教員が指導者となって基本的な生活のきまりの徹底の仕方や遊具の使い方、教材・教具の具体的な指導方法、課題のある子どもへの対応などを中心として園内研修に取り組んだ。

(ア)主な内容

○入園当初の生活のきまり・遊具等の使い方について

- ・下駄箱の靴の入れ方
- ・遊具の使い方
- ・雑巾の絞り方、使い方
- ・水筒のかけ方
- ・話の聞けない子への対応
- ・椅子に静かに座っておくことができない子への対応

○朝の時間のもち方について

○園児への対応について

- ・けじめのつけ方
- ・約束事

○用具の使い方

- ・クレパス
- ・マジック

- ・はさみ

- ・のり

○運動遊びについて

- ・ダッシュ

- ・いろいろな動物の動き

- ・鉄棒

- ・跳び箱

(イ)取り組みについて

ベテラン教員が新任教員のクラスの園児に対して指導を行い、その様子をビデオで撮影した。放課後ビデオを見て振り返りながら話し合いをした。

下駄箱の靴の入れ方や遊具の使い方、けじめのつけ方、約束事など毎日の生活で基本的なことを、最初にきちっと園児に指導しておくことが大切である。基本的な内容がおろそかになると毎日の生活がだんだんと崩れてくる。学級経営で重要なことである。

クレパスやマジック、はさみ、のりなどの教材・教具や遊具の使い方を4歳児も同じように指導することで、次年度は園児が自ら取り組むことができたり、年長児になった時に年少児に対して教えたりすることもできる。幼児同士の連携も生まれる。

指導方法を、ベテラン教員が目の前で指導しているので具体的に学ぶことができた。また学んだことをすぐに実践することができたり、ビデオに撮影していたので後で振り返ることができたりして効果的であった。

新任教員はベテラン教員から指導を受けることで、だんだんと指導に自信を持つことができるようになり、指導に深みや幅ができてきた。

(2).保育カンファレンス

毎週金曜日に一週間の反省と次週の保育計画について話し合いを行った。担任が一週間の取組や園児の様子等について報告し、成長したことを共通理解したり課題は次にどのように取り組んでいくか等について話し合った。園務員さんも含めて職員全員で園児のことや園の活動について話し合うことができたことは、とてもよかった。

保育活動についてどのような環境の構成ができるか知恵を出し合うことができたり、課題を抱えている園児に職員全員でどのように関わっていったりするか具体的に話し合うことができた。園児のことにこまめに関わることで、子ども理解が深まった。

おわりに

研修の中心は子どもである。子どもがしっかり成長するための指導方法について考えなければならない。そのための環境の構成はよかっただろうか、援助や声掛けはよかっただろうかなど考えていく。そして取り組んだことは評価をすることである。評価をすることによって次の課題が見つかる。そして課題を解決していくために新たなテーマが決定されたり、方策を決めていったりすることになる。

教員は、研究保育に向けて指導案を一人一人の子どもの顔を浮かべながら、どのようなことを考えるのだろうか、どのような動きをしたりするのだろうかなどをいろいろ予想したり、活動内容や環境の構成をどうするか他の教員に考えを聞いたり、本を読んだりしながら教材研究して作成していた。そして何度もシュミレーションしながら指導案を手直しして子どもをより成長させようと取り組んでいた。

事後研究会では、ビデオで保育をもう一度鑑賞しながら、保育のねらい、子どもの動きや活動内容、環境の構成などについて話し合った。参加者からは、自分が保育をしているように「私ならここでは〇〇のように援助をするかな」「以前同じような取り組みをしたときに〇〇を用意したら遊びが広がった」などたくさんの意見が出され充実した研修会を行うことができた。

小規模の園では事後研究会の内容を深めることはなかなか難しいと思うが、広範囲の園の職員が合同で取り組むことで、多様な意見が出され内容深い研修に取り組むことができた。多くの教員から学ぶことができ資質向上に繋がった。また他園と合同で研修を進めることで教育委員会の方針等も共通理解しながら取り組むことができるし、職員間のコミュニケーションを図ることができた。

保育実践をしながら研修を進めることは、若い教員もベテラン教員も同じ土俵で話し合える。若い教員はベテラン教員から様々な指導方法や技術などを学ぶことができ、ベテラン教員は若い教員の新しい感覚から刺激を受けることができる。

このように保育実践を通した研修は教員の資質向上を図っていくのにとっても効果的であり、さらに充実させることが必要である。

大村はま氏は「私たち教師は、人間の力、人のよさ、子どもへの愛情、そういうものに自信を持ち過ぎないで、そういったことは当たり前というふうにして、教師でないといけない、といった技術をじゅうぶんに練りたいものです。そして、自信をもち、一教育の専門家として、このことをしていると云える、確かなものをもつ教師になりたいと思います」⁵⁾

研修は積極的に取り組んでこそ効果が上がる。いやいやながらやらされる研修では効果は上がらない。全員がのびのびと意見を言い合いながら、楽しんで取り組むことができる研修をしなければならない。幸い一緒に学んだ教員からは学ぼうとする意欲が感じられ、生き生きと研修に取

り組んでいた。

ただ保育実践を通しての研修は、保育実践をして事後研究会を行い、事後研究会で指導者が今日の保育内容について指導案を基に提案し、参加者が意見を述べ合うパターンの繰り返しが多くマンネリ化しやすい。今回は保育実践にビデオ撮影を取り入れたり、事後研究会での話し合いに付箋を活用したり、若い教員から発言したりするようにしたりしたが、同じことの繰り返しは避け、より研修の効果の上がる方法を常に考えることが必要である。

新任教員など若い教員には、目の前の子どもを通してベテラン教員が直接指導して見せることは、具体的で効果的であり身につくもの大きい。若いときに基礎基本をしっかり身につけておくことは、将来にわたっての力になる。教育委員会等で行われる研修と併せて園内でも取り組むことが必要である。

第2. 研修体系の現職段階での課題と展望で述べたように、研修には養成段階、採用段階、現職段階それぞれの段階で目標があり、学ぶべき内容があるが、現職段階の研修こそ最も力を付けていくことができる。研修は積めば積むだけ力になっていく、研修を積み資質向上を図り、自信を持って教育の専門家として子ども達と学び合える保育者を目指してもらいたい。

引用文献

- (1) 育ての心（上） 倉橋惣三著 p 47 フレーベル新書 12 1976
- (2) 日本の教師に伝えたいこと 大村はま著 p 31 筑摩書房 1995
- (3) 「幼稚園教員の資質向上について－自ら学ぶ幼稚園教員のために」（報告）
幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書 2012 6 24
- (4) 豊岡短期大学論集 13 号 芦田 哲 2016
- (5) 大村はま講演集（上）人と学力を育てるために p 104 風濤社 2004

